
勇者→魔王＝＼（＾o＾）／

夢想曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者↓魔王Ⅱ＼（＾Ｏ＾）／

【Nコード】

N3725Y

【作者名】

夢想曲

【あらすじ】

魔王が突然世界征服するとかいう面倒くさい事を言い始めたので、人々は困り果てていた。それを解決するために（面倒事押し付けるために）勇者召喚をする事になったが——勇者の性格が魔王でした。■タイトルの読み方は【勇者が魔王すぎて世界がヤバイ】。略して【ゆまばい】！！ 某所より転載。

L v . 0 a

魔王とかいそうなそれっぽい城。

その中にあるそれっぽい会議室のようなところでそれっぽい奴らが集まり、それっぽい事を話していた。

「いや、だから僕はこう思うんだよ。最近僕達は人間に舐められる、ってね。昔は魔王Ⅱ恐怖の対象的な感じで恐れられてたけど、今は『はっ、そんなレベル上げて物理で殴れば余裕で死ぬしk s w w w w』みたいに思われてるんだよね。それは流石に魔王である僕や、七大悪魔である君達もちよっと表でろやゴラとか思わないかい?」

と、文にするとひたすら長く、読むのが面倒な台詞をつらつらと述べたのは、文字通り魔王であるルーシャⅡリユツイフェールであった。

魔王というとDrクエとかのひたすらゴツイおっさんを思い浮かべるのが普通であろうが、彼はそんなイメージとは程遠い、むしろ逆の爽やかな好青年という印象がする。

しかし、それは見た目だけで、実際は文字通り何もかも魔王である。

「だから僕は決めたんだよね」

魔王ルーシャは、それっぽい椅子から立ち上がり、窓のそばまでふらふらと歩き、紅く染まった月を見ながらニヤリと笑った。

「————魔王の威厳というのを平和ボケした馬鹿共に味あわせるために、僕は世界征服をさせてもらうよ」

魔王の瞳が、月の色よりも赤く、紅く、赫く染まる。

L v . 0 b

「ウェストと戦争中だというのに世界征服宣言とかマジ勘弁してくれよう………DQN魔王エ……」

そう呟いたのは、東の国、イストの国王だった。

———この世界、【ディヴェルティメント】には、東の国のイスト、西の国のウェスト、南の国のミディ、北の国のノーフの4つの国が存在している。

東、南、北の三国は王が統制しているのだが、西だけは軍事国家であり、西は主に銃や毒薬などの近代的な武器を用いるが、他の三国は魔法を主としている。

簡単にこの四カ国を説明すると、東と西は権力は大きいが仲が悪く、昔から戦争ばかりしている。南は中立的な立場であるが、さほど力は強くない。北は他国との関わりを殆ど遮断している、という感じである。

「マジでどうする？ 多分今この状況じゃ世界征服防げないと思うんだけど」

大分自由な国王がそう言うと、大臣の1人が

「それなら、勇者を召喚しません？ それっばいですし、その方が面倒じゃないかと」

と、国王と同じような感じを醸し出しながら言った。

「確かに、勇者召喚いいな。かつこいいし。……でも、召喚士とか

居たっけこの城内に」

そう国王が言うと、さっきとは別の大臣が手をあげて、

「一応それっぽい事なら出来ますよ。まあ、どんな勇者が来るのかは分からないですけど」

と言った。

国王は少し不安だったが、召喚士を探すのも面倒だったために、それでいいかと思う事にした。

大臣が魔術書を片手に持ち、もう片方の手を伸ばして詠唱をし始めた。

足元には紫色の魔方陣が淡く光り、どこか神秘的な感じがする。

国王は意外な大臣の一面に驚きつつも、その様子をじつくりと見守っていた。

「—————、出でよ———！」

大臣がそう言うと、部屋全体が突然白く光った。

「———！」

国王は思わず目を瞑ってしまったが、すぐに目をなんとか開けた。徐々に光は消えていき、魔方陣の中央には—————

「……………え？」

そこには、勇者どころか、何も現れていなかった。

「おい貴様なに行数の無駄遣いしてんだよゴルァ」

「いや、別に無駄じゃないです、無駄じゃないですって!! 一応その、召喚は成功してますってえええ!!!!」

「いねーじゃねえかよks! どころが成功だこの塵野郎が!!」

以降、醜い大人の言い争いをお楽しみください。

「塵野郎でwwww少なくとも国王が言う台詞じゃないですってwwww」

「話そらすんじゃねえよ!! どこいったんだよ勇者はよオオオオオ!!」

「た、多分召喚は出来てますけど、出来てますけどって痛い痛い首締まってますってッ」

「言えたら話すからさっさと言え!!」

そう国王が言うと、大臣は露骨に目をそらしてボソリとつぶやいた。

「……多分、成功はしましたがその、この世界のどこかに飛びました」

「……………へ？」

「いや、多分ここじゃなくて何処かに飛ばされています」

「……H A ? ?」

素直に召喚士を呼べば良かったと心底後悔した国王であった。

L v. 0 c

フォンシエ・コンテステイは、ごく普通の狩人だ。

イストの小さな村に住み、近くの森で鹿などを狩ったり、作物を育てたりなどといった平和的な暮らしをしていた。

……ま、そういう前置きからしてもう日常は崩れ去るんだろうな可哀想にとか思ってる人は正解である。

フォンシエはいつも通り森に行って鹿を狩ろうとした時に、突然森が眩しく光った。

慌てて森に駆け寄ると、そこには――――

「……………誰？」

切株に寄りかかり、すやすやと寝息を立てている青年がそこにいた。銀髪の青年は美青年と言っているほど顔立ちが整っている。フォン

シエは同性にも関わらず一瞬ドキッとしてしまった。

——絵に描いたような美青年って本当にいるんだなあ。

フォンシエは少しその容姿を羨ましがりながら、恐る恐る近づいてみた。

「おーい、起きてるー？」

寝ているから起きている訳などないのだが、とりあえずそう言ってみた。が、やはり返事は無い。

思わずまじまじとフォンシエは青年の顔を見つめながら、村では見かけない顔だなとか、どうしてこの青年はこんなところで寝ているんだろうとか、そういえばあの光何だったんだろうなどと思った。

「ま、悩んでも仕方ない気もするんだけどな」

そういいながらフォンシエは自分の髪の毛をくるくると弄っていると、青年がゆっくりと目を覚ました。

「……ん、あれ………？」

凜と透きとおった声がフォンシエの耳に響く。

フォンシエは慌てて青年の方に顔をやると、青年はあたりをキョロキョロと見まわしていた。

「ここ、何処だ……？」

青年は困ったような顔をする。

とりあえず何か話しかけないとな、と思ったフォンシエは、少し悩んでから口を開けた。

「やあ、初めまして……だよね。その、君は？」

言った直後にフォンシエはもっと気のきいた言葉を言えばよかったなど一瞬後悔したが、青年は嫌そうな顔をしながらも、すぐに「…ギルベルト・H・アイヒベルガー」と呟いた。

——ギルベルト・H・アイヒベルガー、か。随分かつこいというかゴツいというか何とも言えないような名前だな……。とか、さっきのあの顔は一体……？

と、フォンシエは思わずそう思ったが、首をぶんぶん横に振って、自分も自己紹介しようと思った。

「俺はフォンシエ。フォンシエ・コンテストイ。この森の近くの村に住んでいて、狩人をしているんだ」

フォンシエはそう言うと、青年——ギルベルトは「あっそ」と可愛げのない返事をした。

——口を開くと生意気な奴、ってところか。まあ、俺より年下みたいだし、気にしないでおくか。

そう思った直後、その言葉を速攻で前言撤回したくなるような台詞をギルベルトは吐いた。

「んまあ、よく分からねえけどいいや。——おいお前。フォなんたら。……名前めんどいから下僕。さっさとこの俺様に上質なベツドを用意しろ。というか村とかなんかショボいし都会とかのがいな」

「……………は？」

残念な勇者の物語は、こうして幕を開けた。

――勇者が魔王すぎて世界がヤバイ!!

L v. 1 決意「旅の始まりは冒険の始まり」

狩人である青年——フォンシエ・コンテストイは、とある事件（L v. 0 c 参照）により、異世界から来たギルベルト・H・アイヒベルガーと出会い、下僕と呼ばれるようになった。

フォンシエはとりあえず自分の家に連れていく事にしたのだが、さつきからギルベルトが五月蠅い。

「なんだよお前田舎くせえな」とか「うわマジ田舎なんかよこころわーほんとにもううわー」とかぶつぶつ呟いている。正直フォンシエは殴りたかった。

ちなみに、一番うぜえと思った言葉は「ちょ、弓とかださwww」である。

——胃が悲鳴を上げるのを強制終了させるように腹を押さえ、文句を言わず歩くフォンシエであった。



——なんとか家の前に到着。

「はあ、疲れた……。帰るだけなのにこの疲労感は何なんだ……」
そうフォンシエがため息交じりに呟くと、隣にいる魔王様は超絶不機嫌オーラを放ちながら地面をガシガシと蹴り、

「おい下僕。何なんだこの塵屋敷は。俺様は宮殿並みの超豪邸の高級ベッドで寝てーんだよks!」

と怒鳴った。

「人の家をk s呼ばわりすんなよ！………というか、そんな事言うんだったら勝手に野宿でもしてやがれ！」

対してフォンシエがそう言い放つ。

「のじゅッ……！　チッ、しょうがねえ。我慢して下民の家にてやるとするか……」

ギルベルトは諦めた顔になって家にズカズカとあがりこむ。

フォンシエは頭をかち割りたかったが、なんとか堪えて自分も家にはいった。



「……………んで、どうしてこの世界に来たんだ？」

フォンシエは2人分の紅茶を淹れながら、ギルベルトにそう尋ねた。部屋にはアールグレイのほのかな香りがゆったりと漂い、イライラしていたフォンシエの気持ちは段々とやわらいでいった。

「んなん、こっちが聞きてーぐらいだっつーの。突然俺の視界が真っ白になって、気がつけばあんな森で寝てたんだからよ」

「……………ったく、どうやったら元の世界に戻れるんだか……………」
そう思いながら、ギルベルトは気だるそうに答えた。

「なるほど。………しかし、なんでこんなところに飛ばされたんだろうな。よりによって」

「それはこっちが聞きたいぐらいだっつーの！！……………あ、うめえ」

「はは、それは淹れた甲斐があったってもんだ」

フォンシエはにこにこ笑った。

その瞬間、ギルベルトは即座に「別に下僕を褒めてるわけじゃねーよ!」と言ったが、フォンシエはなんだか微笑ましくなったので余計に笑ってしまった。

——少しは可愛げがあるんだな。……一応は。

そう思いながら、フォンシエは本題に戻る事にした。

「しかし。どうする?こんなところに居ても解決はしないだろうし……」

「早く都会の豪邸の以下略したいしな」

ギルベルトの必殺ドヤ顔攻撃。フォンシエの苛立ち度は5あがった!

「……それは置いといて。まあ、一番は情報収集なんだろうけど、こんな田舎には情報通の奴なんてそうそういないし」

「それならお前が集めて来い。都会まで行ってな」

「なんで俺なんだよ!——あ、その手があったか」

フォンシエはそう言って立ち上がると、何かを探し始めた。

「ん、何やってんだよ」

ギルベルトがそう尋ねると、フォンシエは地図を手にながら

「旅して情報を集めればいいじゃないか。お前が此処に来た理由も分かるだろうし、なんせ俺も一度は旅してみたかったんだ。なかなか名案じゃないか?」

と言った。

ギルベルトは少し悩んでから、まあ、それはそれで楽しいかと思い、承諾をした。

こうして、二人は旅をすることになり、明日に備えて早めに寝る事にした。

これから様々な出来事が起こる事を知らずに――――

L v. 2 疑問「フォンシエって…」

翌朝。

小鳥の声がうんぬんとかいうよくある描写は割愛。

残念魔王系異世界人ことギルベルト・H・アイヒベルガーは、くしゃくしゃと頭を掻きながら、ゆらゆらとした覚束ない足取りで椅子の前まで行き、どさりと座り込んだ。

ゆらりとアールグレイの香りがギルベルトの鼻をくすぐる。

昨日とは違う匂いだなと思いつながら、紅茶を注いでいる狩人に話しかけた。

「これって何茶？」

まだ寝ぼけた声のギルベルトとは対照的に、フォンシエははきはきとした声で「レモンティーだよ」と答えた。

その表情は、新しい物を見る少年のようにキラキラと輝いており、恐らく旅の始まりにそわそわしているのだろう。

「……お前、子供かよ」

思わずギルベルトがそうツツこむと、フォンシエは苦笑いした。

「ははは、確かにそうかもな。——でも、夢だったんだよな。こういう風に旅立つって事がさ」

「……あっそ」

ギルベルトは、なんとなくフォンシエの顔が見れなくなって、少し目をそらした。

——ん？

そういえば、昨日からずっと疑問に思っていたことがあったのを思い出した。

「おい下僕」

「また下僕かよ。……まあいいや、何だ？」

フォンシエがそう言って少し首を傾げると、ギルベルトはぼそりと呟いた。

「お前、その耳————なんでそんな変なんだ？」

そうギルベルトが言った瞬間、フォンシエの耳————先のがった長い耳がピクリと動いた。

「ああ、この耳のことか。……いつ質問されるのかなとは思っていたけど」

フォンシエは苦笑すると、自分の耳をいじった。

「俺の耳は、見ての通りエルフ耳なんだよ。この世界では低確率でこの耳の人間が生まれるんだ」

「へえ……………。って、たしかエルフって妖精とかじゃなかったっけ」

「いや、そうじゃない。れっきとした人間さ。ただ、普通の人間よりも五感とかが鋭かったりするんだけどね」

そう言うと、ギルベルトは羨ましそうに耳を見つめた。

「なんかすげーな、それ」

「ははは。……でも、本当にランダムなんだよ。普通の人間と人間から生まれることもあるし、両方がエルフ耳の人間でも生まれない事もある。ま、これは神様からの贈り物ってヤツさ」

自慢げに語るフォンシエ。

ただ、その瞳は少しだけ寂しそうに揺らいでいた。

「じゃあさ、デメリットとかって……」

そうギルベルトは言いかけたが、フォンシエの表情を見て、思わず言葉をひっこませた。

「……ああ、あるよ。……この耳の人間をよく思わない人間もいてさ。お前らなんか人間じゃない、さっさとこの世から消えてしまえとか言って。……そいつらがエルフ耳の人間を虐殺するという話もよく聞くんだ」

「……………」

部屋中に暗く乾いたオーラが広がる。

それに気付いたフォンシエは、なんとか変えようとにっこり笑った。

「まあ、エルフ耳の人間が様々な便利な道具を作って世界から評価されてるといふ話もあるから、必ずしも全員に嫌われてる訳じゃないよ」

それを聞いて少し安心したギルベルトは、ふうとため息をついた。

「ま、旅の途中でそいつら見つけたらやつつけばいいしな」

「お、たまにはいい事言うじゃないか」

「そうすりゃ名が広まって新世界の神に……」

「そう言った俺が馬鹿だったよ……」
フォンシエは呆れながら言うと、ギルベルトはニカッと笑っていった。

「飯！！ 腹減ったさっさと作れ！！」

「へいへい、分かりましたよーっと」

昨日よりも騒がしい朝食に胸の奥がむず痒くなりながらも、フォンシエは少し嬉しくなっていた。

Lv. 3 武器「えー、マジっすかー……」

「まずい！ もう一杯！！」

「青汁じゃねえんだから…」

そう言いながらも、フォンシエはギルベルトにおかわりのパンを出してやる。

フォンシエはコーンスープにちぎったパンをつけ、幸せそうに頬張っていた。

「うめー！ 間違えた糞不味い！！ コーンスープ糞不味い！！」

「なんか褒められてるんだが貶されてるんだか分からないんだが…」

「貶してるに決まってんだろこのGEBOKU！！」

「……へいへい。溢さずに食べてくださいねご主人様っ」と

ギルベルトの口の周りについているコーンスープをジト目で見ながら、フォンシエは自分の使った食器を洗っていた。

「……そういや、旅に出ればもうこいつらを使うのはしばらくは無いんだよな……」

気に入っていた柄の皿を見ながら、フォンシエはしみじみとそう思った。

と、そんなフォンシエをガン無視するかのようには、ギルベルトは食べながら喋った。

「そういや、武器とかまら決まってねえよな。俺様の。やつふあり異世界から来た奴Ⅱ剣だよぬあつ」

「どんな方程式だよ。……でも、俺弓使いだから剣とかあんまいモンねーぞ」

行儀の悪さに半ばあきれながらも、フォンシエはそう応える。

「むあ、RPG的には序盤だから別にシヨボいのもかまふあぬえーけろっ」

「……本当にシヨボくてもいいなら無くは無い、けど」

そう狩人が言ったのと同時に、我が儘異世界人は口の中に含んでいたパンを飲み込んだ。

「え、マジで？」

ギルベルトが意外そうな顔でフォンシエを見ると、フォンシエはため息をついた。

「嘘言ってもしょうがないからな。——でも、見たところで文句言わないでくれよ？」

「それは見ないとわかんねーよ」

「まあ、そりゃそうなんだけど……。とりあえず引っ張り出してくるよ。その間に使い終わった食器をキッチンまで運んでくれな」
「却下」

「……」

やれやれ、と心の中で呟きながら、フォンシエは物置に向かった。

「——なあ、ちょっと待ってくれ」

ギルベルトは嫌そうな顔をしながら早口で言った。

フォンシエはやっぱりか……と思いつながらも、持ってきた武器をちらりと見る。

「これってさ、その、武器？」

「一応形はそれだし、多分武器」

「……戦えんのか？」

「……………多分」

「こんな装備で街うろろしてたら確実に変人扱いされると思うんだが」

「その時は新しい武器を買えば——」 「それまでが恥なんだよ！！ この腐れ下僕！！」

ギルベルトはそう言い放つと、一応自分の武器であるモノを地面に思い切り投げ捨てた。

ぎるべると・H・あいひべるがー
ぶき ぼくとう

「……木刀だって一応武器として成り立ってるんだよ！！ RPGの主人公だってこれ初期に装備してんの！！ 分かれ！！」

「わかりたくねーよ！！ 何で木刀なんだよチキショー！！！！」

2人は暫く木刀についての言い争いをしていたのであった——。

「……あ、結局木刀持っていくんだ」

「絶対にフツの武器に変えてやるんだからなああああ！！！」

L v. 4 油断「愛玩動物恐るべし」

「―――さて、準備も済んだところだし、そろそろ出発しようか」

愛用の弓を持った狩人――フォンシエが、木刀を持った異世界人――ギルベルトにそう言った。

ギルベルトは気だるそうな顔をしながらも、のんびりと首を縦に振った。

やっと、この二人の冒険が始まることとなった。



「そういや、さっきから気になってた事があるんだけどよー」

ギルベルトは木刀をいじりながらフォンシエにそう問いかけた。

フォンシエはちらりとギルベルトの方を見ると、ギルベルトは自分の頭を掻きながら口を開けた。

「戦い方と違ってどうやるんだ？」

「あー……」

もってもらしい質問をされて、フォンシエはそういや言ってなかったなと心の中で呟いた。

「実際戦ってみれば一番分かるんだけど、村から出ないとできない

からな―」

「え、なんでだよ」

ギルベルトは首をかしげると、フォンシエは薄く笑った。

「えつとな。……こういう村とか町とかには、モンスターがはいれないように結界がはってあるんだ。そうじゃないと安心して眠れないしな」

「へー。……じゃあ、こういう所に来れば安心なんだな」

「いや、そういう訳じゃない。たまに結界が一瞬薄くなる時があつて、その時にたまたまモンスターがはいりこむ、って事もあるんだ」

――そうフォンシエが言った瞬間、突然民家の近くからガタツという物音がした。

ギルベルトは何かが落ちたりしたんだろうな、と呑気に思っていたが、フォンシエは突然笑顔を消した。

「ん、どうしたんだよ下僕」

ギルベルトがそう言うのと、フォンシエは自分の人差し指を軽く唇にあてた。

「しっ、静かに。――どうやら丁度いいタイミングでモンスターが村にはいりこんだみたいだ」

「マジかよッ。……てか、よく分かったな」

「前にも言ったろ。エルフ耳の人間は五感が鋭いつて。……そうだ、丁度いい。討伐ついでにお前に戦い方について教えてやるよ」

そう言うのと、フォンシエは軽くウインクした。

「……めんどくせ。でもしゃーねえ、戦えねーとこの先めんどくせえもんな」

そう言うのと、ギルベルトは自分の剣――とはいっても木刀だが――を構えた。

「んで、どうすりゃいいんだ下僕」

「そうだな……。多分向こうはこっちに気付いてないみたいだから、挟み撃ちにしよう。お前は正面から民家の方に向かってくれ。俺は背後に回る」

「なんか、お前に命令されるのは癪に障るが……。まあ、今回は特別だっ」

そう言った途端、ギルベルトは民家の方へダッシュした。

「俺も速くいかねーとなっ」

そう言うのと、フォンシエは民家の背後へと回った。

「————こいつ、本当にモンスターなのか？」

ギルベルトは目の前にいる——どう見ても愛玩動物ウサギにしか見えないモノを睨みつけた。

そのウサギのような何かは普通のウサギとは違い、毛が紅い。だが、その顔を見ていると、木刀を握っている自分が悪者のような気がしてきて、ギルベルトは複雑な気分だった。

とりあえず、試しに恐る恐る近づいてみることにした。

————もしかしたら、捕まえたら高値で売れるんじゃない？

そんな残念な事を考えていると、突然、

「シャー——————ッ!!!!」

「くぁwせdrftgyふじこlpぎゃあああああああ!!!!!!」

ウサギのような何かは口から炎を吐きだし、それがギルベルトの右足にヒットした。

「あづー！！ あづー！！ 死ぬ、あづッッッ！！」

そんな風にギルベルトがギャーギャー騒いでいる間に、ウサギ以下略はその場から逃げ出そうとした。

———その刹那。

「『パラサイト』！！」

バビュッ、という音とともに、風が実体化したような矢がウサギのような何かの左前足にヒット。

あまりにも突然の事だったので避ける事が出来なかったウサ以下略はモロに命中し、悲鳴をあげて蹲った。

ギルベルトは声の方に慌てて振り返ると、そこには弓を持ったフォンシエがいた。

「すまんすまん、もっと早く駆け付けるつもりだったんだが」

涙目のギルベルトを見て、フォンシエは苦笑いしながらそう言った。

「ったく、本当にそうだったーの！！……っーか、今のって下僕の技なのか？」

「おう。……一応麻痺してるとは思うけど、まだ止めを刺してないからな。戦闘方法を教えながらやっつけちまおう」

ニコリとフォンシエが笑うと、ギルベルトもつられて笑った。

「うっし、ぜってーブツ殺してやる……!!」

——黒い笑みだったが。

「ははは、怖い怖い」

そうフォンシエが思わず声を漏らす。

———そうして、ギルベルトの初戦闘が幕を開けた。

Lv. 5 戦闘「とりあえずなぎ倒す!!」

「まず、戦闘について軽く説明するぜ」

「簡潔に纏めろよな下僕」

木刀とロングボウを構える2人の野郎と、見た目が愛玩動物な炎兎。なんだか文字にすると非常にシュールな光景だが、剣と魔法の世界だと許されるから不思議だよね!!

———何でこいつはいちいち上から目線なんだ……

と心の中でボソリと呟きながら、フォンシエは説明し始めた。

「まず、戦闘は殺し合いとか戦争とかと違って『魔力』を消費するんだ。さっきこのウサギーファビットが吐きだした炎は『魔力』を使って出たものだから、別に火傷する訳じゃない」

「へー、通りで傷跡が無い訳だ」

「そう。……ま、自分の魔力は攻撃したり攻撃を受けたりすると減るんだけどな」

「え、マジかよ。……つまり、HPとMPが一緒になってんのか。

単純なようでめんどくせえな」

『HP』と『MP』という聞きなれない言葉に違和感を覚えつつも、フォンシエは話を続ける。

「ちなみに、戦争などでは『体力』を消費する。これは魔力とは違って最悪死んだりもするけど、魔力は尽きたら『戦闘不能』という表記が……何故だか知らんが頭上に出て、また何故だか知らんが近くにある宿屋に飛ばされるんだ。ちなみに戦闘不能の人間は攻撃できないぜ」

「っへー。俺前半の五文字しか聞いてヌエー」

「————ッッ、」

————こいつ殴りてえ……。

しみじみと思ったが、仕方なく耐える事にした。

「……ああ、そうそう。一応ただ剣振ったり弓射ったりするだけで魔力は消費されるんだが……、それよりも大量に魔力を消費するが、その分高い威力になる『術』・『技』もあるんだ」

「え、マジで?!」

何故か異様にテンションが高くなるギルベルト。

「……そうかあ。それなら俺様も鳳凰t n翔駆とか出来るのか……テンションあがるな」

「？」

フォンシエはさっきと同様に聞きなれない単語を聞いたためか、頭上にハテナマークをだした。

「まあ、そういうのは自然と習得されてたりするんだけどな」

「へー、つまり自然とレベルアップしてるのか……ファンタジー世界パネエ」

「まあ、よく分からないが気に入ってもらって何より」

フォンシエはにこりと微笑んだ。

——とその刹那、ファビットが痺れを切らして（説明を黙って聞くRPGのお約束的なモンスター）炎を吐きだしてきた。

フォンシエはギルベルトの腕を掴み、間一髪で避ける。

「つと、そろそろ麻痺も薄れてきたか」

フォンシエはそう言うと、一本矢を取り出し、ファビットの足を狙い、射った。

足から少しずれたが、ファビットの胸に命中した。

「さて、そろそろやるか！」

「おう！」

ギルベルトは意気揚々と木刀を構え、ファビットの方へダッシュ。ファビットの首元を狙い、一気に木刀を突く。

ファビットは避けようとしたが、あまりのスピードに避けきれず、

モロに木刀が当たり、「キャン!!」という悲鳴をあげて転がり、民家の壁に衝突した。

「……お前、前に剣持って戦った事あんのか？」

思わずそう訊いてしまう程、ギルベルトの動きは機敏だった。

「は?……いや、特にねーけど」

不思議そうな顔をして答えるギルベルト。

フォンシエは天才って本当にいるのかと少し感動した。

「そういや、俺も技とか使ってみてーんだけど。さっきのお前みたいに」

ギルベルトはキラキラと瞳を輝かせながらフォンシエにそう言った。

「そうだな。まあ、上手くいくかどうかはお前の腕次第なんだが……

……まあいいだろう。——瞼を閉じてくれ」

フォンシエがそう言うのと、ギルベルトはゆっくりと瞼を閉じた。

「そして、そのまま剣先に意識を集中させるんだ。上手くいけば技がぼんつと浮かんできて、発動させる事が出来る」

ギルベルトは言われた通りに剣先（木刀）に意識を集中させる。

——ッッ!!

頭が突然かき混ぜられたような変な感覚になる。

ギルベルトは剣を握る手の力を強くさせ、なんとかそれに耐える。

そして。

————思い浮かんだ!!

ギルベルトはぱあっと表情を明るくし、技名を思い切り叫んだ。

「『業火剣』！！」

突然剣（木刀）が炎に包まれ、その勢いでファビットを思い切り斬る。

……ぶっちゃけ属性的にはあまり意味が無いような気がするのだが、そこは置いておいて。

だが、そんな弱点をカバーする程の威力でファビットを斬ったのと、前の攻撃で魔力を消費していたのでファビットは戦闘不能となり、目の前から姿を消した。

「いやった、俺様が倒したああああっ！！！！」

ギルベルトは木刀を空に掲げ、最高の笑顔になった。

—

L V. 6 説明「ようこそ イティニム むら」へ!! ▼ (前書き)

Lv. 6 説明「ようこそ 【イティニム むら】へ!!!▼」

「よかったな、無事成功して」

フォンシエはにこりと微笑む。

一方、ギルベルトは子供のようになつて無邪気にはしゃいでいた。

「ははー、褒めた後に馬鹿みたいに称えやがれ下僕ー!!」

「そう言わなければせめて褒めるぐらいする気になるんだがなあ……」

そう言いつつ、フォンシエは少し褒めてやったのであった。

「そーい、建物とかは傷ついてないのな」

辺りを見まわしながら、ギルベルトがそう呟いた。

「まあ、一応消費してるのは『魔力』だからな。魔力は自然のエネルギーみたいなものを利用してらしいから、建物に当たったりして壊れたとしてもすぐに……何故だか知らんが修理されるらしい。勝手に」

「自然パネエ!!」

「……本当だよなあ」

ギルベルトがぎゃーぎゃー騒いでるのを見て、フォンシエはクスリと笑った。

「……あー、何年振りかにはしゃいだから疲れた」

「残念な感じが漂いまくってるんですけど」

ギルベルトはさっきとは一変しまくりな、超絶不機嫌顔となった。

「じゃーねえだろ、人生なんて楽しくねえんだから」

「まだお前若いよな?! まだ若いよな?!」

「17なんてその内死ぬ程度だろ」

「21の俺に謝ってくれ!!!...まあ、俺も年寄りって訳じゃねえけど」

戻ったせいか疲労が...と、フォンシエは心の片隅でそう思った。



気だるげな異世界人を引っ張りながら歩いていると、平原への入り口付近にいかにも村人A（おっさん）といった感じの人間が立っていた。

「んだ、あいつ」

ギルベルトが目を細めながらそう言うと、フォンシエはさらりと

「ああ、あれはこの村ーイティニム村について説明する...という
か必ずどんな場所にも存在する伝説の男、【説明神】さ」「f m d
k l d z x c m、n h j f s、.. z n d、g t f g z z z z z z」

ギルベルトは思い切り吹きだす。

フォンシエはギルベルトが吹きだした理由が分からなかったがとりあえず苦笑いした。

「いや、今のどこが面白かったんだ?」

「面白かったとかそういう次元じゃねーよこれ!!!」

「...もしかして、お前の世界には説明神はいないのか?!」「いてほしくねーよこんなの!!!」

フォンシエは驚愕のあまり、持っていたロングボウを地面に落した。

「ま、まさか……そんな事があって………」
フォンシエが暫く口をあんぐりと開けて硬直したままになったので、ギルベルトは見なかったことにして、説明神とやらの話しかけてみることにした。

「おい、そのお前」

『ようこそ 【イティニム むら】 へ!!! ▼

ここは きみの たびだちの むら! ▼

ゆうきを だして ここから とびだせば ▼

きつと きみの でんせつは せかいに ひろがる はずだ! ▼』

「……………」

———コメントしようがねえ……

思わず思い切り説明神を睨みつけてしまったギルベルトは、慌てて
少しだけ表情を柔らかく（とはいっても恐ろしいのに変わりはない
が）した。

「あの s『ようこそ 【イティニム村】 へ!!! ▼

ここは きみの たびだちの むら! ▼

ゆうきを だして ここから とびだせば ▼

きつと きみ「同じ台詞しか言わねえんかよ k s!!!」

相手するのが面倒になったので、ギルベルトはフォンシエを叩き起
して平原へと向かっていった。

Lv. 7 夢想「不思議ちゃん系な旅人さん」

「そーいやー、何処行くんだ？」

ギルベルトは木刀をいじりながらそう言う。

「ああ、そーいや言ってなかったっけか。……ここから暫く東の方向に向かって歩いていくと、この国——イストで二番目に有名な【シアオン】という街だ。平民からお貴族様までいる、大分賑やかな街なんだぜ」

まあ、行った事は数回ぐらいしかないんだけどな、と言って照れ隠しに笑ったりしながらも、フォンシエは嬉しそうに話した。

ギルベルトは自分とは真反対のまっすぐしたその姿勢に眩しさを感じた。

「……どうしてそんなに嬉しそうなんだか」

ギルベルトは微かな声でそう呟いた。

フォンシエは、何か言っていたことには気付いたが、あまりにも微かな声だったために、自慢も耳でも聞き取ることが出来なかった。



「『時は儚く 美しく そして 何よりも残酷で
ボクを優しく そして冷たく そわり そわりと 包み込む——」

「」

しっとりとしたバラードを、透き通った声がしんみりと音を紡ぐ。
その声の主は、一風変わった風貌の青年だった。

小麦色したショートカットの髪だが、もみあげは少し長めで、色は赤紫であった。瞳の色は澄んだ青色で、緑のメルヘンチックなジャケットを羽織っており、第一印象が『変人』そのものだった。
どうやら、右目の辺りに大きな傷を負っているようだが、遠くから見ると、そのようなメイクにしか見えない。

2人が歩いている途中に歌声が聴こえてきたので試しに近づいてみたら、不思議な風貌の青年（道化師か何かにしか見えない）を発見したのである。

怪しさを異様に放っているが、とりあえずギルベルトが話しかけてみることにした。

「おい、その変な奴」

初対面の人間に言うのはどうかと思う台詞でその青年に話しかけるギルベルト。

対して、青年はくるりとこちらの方を振り向き、さっきの台詞など全然気にしていないというような気の抜ける笑顔をしていた。

「ははは、初対面の人間にいきなり変な奴かあ。まあ、ボクはさほど気にしていないし気にする必要もないから怒らないでおくけど」

「———そうか、見た目通りこいつも変人なのか……
フォンシエは残念な気持ちさが広がらんぐった。」

「ああ、そうだそうだ。やっぱり初めましてコンニチハな人には自己紹介が必要だよねえ」

青年はにこりと微笑む。

そんな青年を見て、2人は反応に困っていた。

「ボクの名前はトロイ・メライ。さて問題！『トロイメライ』とはどういう意味でしょうじゃかん！ 正解はドイツ語で夢想曲！！……ああ、ドイツってどこ？とか聞かないでね面倒くさいから！ んでー、ちなみに意味はロマンティックな、器楽用の小曲なんだよー。——ふふっ、まるでボクみたいだ」

一方的に語りだした青年——トロイ・メライは、ドン引きしている2人の青年をさほど気にしていない様子で語りだした。

「ボクは世界中を旅する旅人さ。……ところで、旅人って響き、なかなか素敵だと思わないかい？ 音楽的だよねえ。ボクは好きだなあ。そうそう、ボクは歌う事が好きなんだ。楽器を弾いたり吹いたりするのも好きなんだけどさ。でも声で表現する方が楽しいんだ！！……そういうや名前は？」

——普通逆だろ！！

と、二人とも心の中でそうツツコミをいれたが、無駄のような気がするので止めることにした。

「俺様はギルベルト・H・アイヒベルガー。気軽にギルベルト様とも呼べ」

「それ気軽でもなんでも無いんですがねえ……。まあいいか。俺はフォンシエ・コンテストイ。ついさつき旅を始めたばかりなんだ」
軽くそう自己紹介をすると、トロイは嬉しそうに笑った。

「君達も旅するんだね！ 素敵な旅になるといいねえ」

——それが、不思議系旅人、トロイ・メライとの出会いだった。

L v. 8 秘弾「T・M・夢想的旅人は何者なのか？」

「———そういえば、さっきから密かに密やかに気になってただけださ」

「ん？」

トロイはゆらゆらとギルベルトの方に近づく。

そして、よきりと顔をギルベルトの近くにやった。

その後に、はつきりと、そしてじんわりとギルベルトに問いかけた。

「なんで、武器が木刀なの？」 「ブツツツ」

ギルベルトの唾が思い切りトロイの顔にかかる。

「ちよ、まさかのダイレクト唾攻撃?! ボクのチキンっぽいハートがズギシギシっと傷んだよ?!」

「それはこっちの台詞だks!!」

トロイは困惑し、ギルベルトはキンキンと喚く。

ある意味その元凶なフォンシエは、どういえばいいか分からず、とりあえず黙っていた。

「ま、RPGの序盤っぽくて嫌いじゃないけどね。ボクも持ってるし」

「持ってるんかい!!」

ツッコミ担当であるフォンシエが衝動的にツッコむ。

「ほらね」

トロイは笑顔で、どこからか知らないが恐らく背後から木刀を取り出す。

「「!!??」」

あまりの予想GUYな出来事に、2人とも露骨に動揺した。

「まあ、でもこれは割とどうでもいいからしまっておくね」

そしてまた恐らく背後へと木刀をしまう。

慌ててギルベルトが背後を確認したが、そこには何もなかった。

「ちょ、ま、え、はぁいいいいい??」

思わず間拔けな声が漏れだすギルベルト。

——こいつ、Drえもん亜種?!

と、思わず、四次元ポケットのあのネコ型ロボットが思わず頭によぎった。

「こらこら、ファンタジー世界で変なツッコミは無しだよ」

トロイはにへらとやはり気の抜ける笑みを浮かべる。

段々色々がどうでもよくなってきた2人は考えるのをやめることにした。

「まあ、流石に木刀だとこの先無理があるよねえ」

「うっせ!! これしかねえッつってんだろ!!」

「ははは、怒らない怒らない」

トロイは指で自分の頬をふにやりとあげた。

ギルベルトはあまりのウザさに歯ぎしりしたが、反論してもしようがないので言葉を飲み込む。

「そんな君にいい事を教えてあげよう。……実は、この近くの森、『リヒト』って名前の森なんだけど。そこにどうやら凄い武器が眠ってるって噂だよ」

まあ、守護者の人もいるらしいけどね、と言ってトロイは笑った。簡単に凄い事いっているが大丈夫なのかとフォンシエは心配したが、

トロイは心を読んだかのように、ボクはいらないからいいよと言って微笑んだ。

「……その情報に嘘はねえんだよな」

「ははは。嘘だったらボクに次あった時ボクを殺してくれても構わないよ」

トロイは笑顔で恐ろしい事を言い放つ。

「んなら、信じてやろう。ただし、嘘だったとしたらお前を八つ裂「なんでお前は情報を教えてくれた人間にそんなに上がり目線で物が言えるんだよ！」

フォンシエはポカリとギルベルトの頭に拳骨した。

「ツツツツッ！！　なにすんだこの下僕ツツッ！！」

「お前が悪いだろう考えてもっ」

「下僕が主人殴るイコール万死に値するんだよks!!!!」

「誰がいつお前の下僕になったんだ！そしてお前が主人な訳あるか！」

そんな感じでうぎぎくぎぎ上海蓬萊している2人の間に、トロイが割り込む。

「まあまあ、落ち着いて落ち着いて。怒ってばかりだと体が疲れちゃうよ。喧嘩するほど仲がいいってやつかもだけど」

トロイの気の抜ける笑顔のお陰か、2人は黙りこくる。

「ま、ボクは寛大だからね。一々そんなことで怒ったりしないさ。

まあ、誰かに武器を取られてなければ本当にあるみたいだから、安心して行った方がいいと思うな」

「そうか。まあ、わざわざこんな田舎の方に来る人間はいないだろうから、とりあえず行ってみるよ。有難うな」

「うん、日が暮れないうちに行った方がいいよ。一応モンスターもいるみたいだし、気をつけてねえ」

ギルベルトが喋らないように（話にならないので）フォンシエがギルベルトの口を押さえたまま会話していた。
ギルベルトは必死に抵抗していたが、残念ながら手から解放される事はなかった。

暫く行き方などを聞いた後に、ようやく手から解放されたギルベルトは、ぐちぐちと文句を垂れ流した。

そんなギルベルトを引っ張りながら、フォンシエはトロイに軽く手を振った。

「それじゃ、俺達は行かせてもらうよ。また会った時にお礼をさせてもらいたいな」

「はは、別に構わないよ。まあ、その武器は是非見せてもらいたいけど」

「ぜってーみs……10万くれたら考えないこともない」

「意外と庶民的……。って、教えてもらった人間が何で払うんだよ……」

「ふふっ、君達って愉快だねえ。見ていて楽しいよ」

こんな気持ち久々だなあと嬉しそうに呟くトロイ。

何かを思い出しているような、そんな儂げな表情の彼だったが、2人はぐだぐだ話していたために気付いていないようだった。

「さ、そろそろ行きなよ。日が暮れる前にね。なんせ森は迷いやすいし」

「ああ。名残惜しいけどな。……んじゃ」

「それじゃ、また会ったときはよろしく」

「うん。また会おうね」

そうして、2人は森を指して、トロイは反対方向へ歩きだした、

——と、その時。

パシリとフォンシエの腕をトロイが掴んだ。

慌ててトロイの方を向いたが、そこにいたのは先ほどとはかけ離れた、真剣な表情のトロイがいた。

「君、エルフ耳なんだよね?……あらかじめ、忠告しておくよ。

——『リヴァイタス』、っていう組織の人間には絶対に近づいたら駄目、だよ」

トロイはそう言った途端、さっきの柔らかい表情に戻った。

「ごめんね。突然こんな事して。……でも、この言葉、忘れたら駄目だよ?」

フォンシエは暫く身体が動かせず、ただ硬直していたが、ギルベルトの呼びかけに気づき、慌ててその方へ走っていった。

——あいつ、何者なんだ?

胸の奥に、そんなモヤモヤを抱えながら。

L v. 9 天然「魔法娘は天然娘」

不思議ちゃん旅人ことトロイ・メライと別れて数十分後。
異様に緑が深い場所、リヒトの森の前に到着した。

「丁度ここを抜ければシアオンの近くに出れるらしい。本当に好都合だったよー……って、ギルベルト？」

気がつけば相方がどこかに消えたので、辺りを見回すフォンシエ。すると、なにやらギルベルトは説明神のところにいるようだった。

「って、あんなところに……」

フォンシエはため息をつき、とりあえずその方向へと歩いた。

『ようこそ 【リひとのもり】 へ!!! ▼』

ここは みどりが ところを いやしてくれる ばしょ! ▼

おもいきって はいって みれば ▼

たいようの やわらかい ひかりが きみに ふりそそいで くれるぞ! ▼』

———と、そんな台詞を後頭部が光り輝くおっさんが言い放っていた。

言葉にするとかなり痛いが、説明神だから許される。説明神素敵。

「……だつてさ下僕」

「いや、俺に振るなよ!」



2人はどんどん森の奥へとはいっていく。

どうやら、整備された道には簡易結界が張ってあるらしく、モンスターが入れないようになっていた。

だが、武器が眠っているという場所は、その道から外れたところにあるために、モンスターに遭遇してしまうらしい。

「まあ、だとしてもなぎ倒せばいいだけだしな」

「んな事言つてやられるなよ?」

「ツツ、おめえこそやられるんじゃないやねえぞ! 油断してグサツとかな」

「はいはい、気をつけまーっす」

ギルベルトの台詞をさらりと受け流し、フォンシエはのんびり歩いた。

——と、その時。

「あー、フォンシエさん!!」

柔らかなソプラノヴォイスが、2人の耳に響いた。

ギルベルトはどうでもよさそうな顔をしていたが、フォンシエは目を丸くした。

「え、何で君がここに……？」

フォンシエは座り込んでいる少女を見て、無意識にそう言った。

「いやあ、ここってすごく美味しい木の実が穫れるんですよ。なので入っていったんですけど、足を挫いちゃって……」

そう言っ、少女は自分の右足を指差す。

見てみると、少女の右足は少し腫れていた。

「……随分痛そうだな。立てるか？」

そう言っ、フォンシエは少女に手を差し伸べると、少女はゆっくりとその手につかまってよろよろと立ちあがった。

「すみません、こんなことして貰っちゃっ」

「いいや、別に構わないさ」

フォンシエは心配かけないようにと柔らかく微笑む。

少女はその笑顔を見てすこし恥ずかしそうな顔になった。

……と、こんな様子を見ていたハブラレ異世界人は、不満そうに口を尖らせた。

「んだよ、俺様だけ省きやがっ……。ってか、そいつ誰」

ギルベルトがどちらかというと正論を言う。

少女はハッと顔をギルベルトの方に向け、慌てて自己紹介をした。

「す、すみません！……えと、私はエテルナ。エテルナ・グラータエアっていいです。フォンシエさんとはお隣さんで、いつも優しくしてもらってるんです♪あ、ちなみに魔術師です」

少女——エテルナは、そう言うのにこりと微笑んだ。

それと同時に、彼女のチャームポイントである、太陽の光に反射して美しく輝く淡い水色のロングヘアーがさらりと揺れた。

「ふーん。魔術師、ねえ……」

「一応、援護系から攻撃系、更には回復魔法まで、何でもできるんです♪」

そう言った途端に、エテルナはよろけて転びそうになったが、慌ててフォンシエが彼女を抱きとめた。

「っと、危ない」

「はうっ!!」

突然エテルナの顔が林檎のように真っ赤になり、エテルナは慌ててフォンシエから離れた。

「すすすすすすすみません!!」

「ははは、別に構わないさ。——って、そういえばさ」

フォンシエはそう言うと、エテルナに的確すぎる一言を放った。

「回復魔法使えるなら、自分の足の傷を癒せばいいんじゃないか？」

「……あ」

その後、エテルナは回復魔法を足にかけたところ、八割方回復しましたとき。

「……アホかよ」

「人はそれを『ドジ』って言うんだぜ」

Lv. 10 困惑「ギルベルトさんどう接すればいいのかな……」

「さて、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないのか？ 森は暗いから、遅くなると帰るのも困難になるだろうし」

フォンシエがエテルナに心配そうにそう言うのと、エテルナはぷんすかと怒った。

「あう、フォンシエさん！ いつまでも子ども扱いしないでくださいよう！」

「そう言われてもなあ……。まだエテルナは13歳じゃないか」

「13だって立派なオトナです！」

「それに、君の親御さんたちは心配性だから、君よりも俺が怒られてしまうよ」

「……うつ」

エテルナは何も言えなくなって黙り込んでしまった。

ちょっと過保護すぎるところもあるけど、それでも大切な家族。心配をかけさせる訳にもいかなかった。

「それもそうかも、ですね……」
しょんぼりと項垂れるエテルナ。

そんなエテルナを見て、ギルベルトがぼそりと呟いた。

「んなら、勝手についていきゃいいんじゃないの。帰りとかは自分で何とかしてくれるんなら、別にいいけど。……足引っ張んなけりや」

ぶっきらぼうながらもギルベルトの優しさが表れたその台詞に、フォンシエはほっこりとした気持ちになった。

エテルナはまさかそう言われるとは思っていなかったのので、驚きつつも嬉しそうに顔をあげた。

「じゃあ、フォンシエさんは——」

フォンシエは少し悩んだが、ギルベルトの優しさと、エテルナの嬉しそうな表情に負けて、

「しゃーねえなあ。……1人できちんと帰れるならいいぜ」

「は、はい!!」

こうして、三人の森探索が始まった。



獣道をずんずかと進んでいると、初めてのモンスターが現れた。

……のだが——。

「んだ、コレ」

変な毛玉のようなもの（何故か足も生えている）がふわふわと三人の周りに浮遊していた。

その容姿はまるじり作品に出る黒いアレのようだった。

だが、色は緑色をしていて毬藻のキャラにも見える。

試しにギルベルトはそれを木刀で突くと、その毛玉のような毬藻のようなものはふわりとその方向へと飛ばされた。

「――本当に何だこれ」

とりあえずフォンシエに尋ねようと思ってフォンシエのいる方向へと振り向いた途端、衝撃的な光景がギルベルトの視界に広がった。

「『ヴェイント』!!」

とフォンシエが言うのと同時に、風を纏った矢がその毛玉以下略に貫通した。

そしてその毛以下略はピギャツとかいう悲鳴のようなものをあげて消え去ってしまった。

「……………!!??」

ギルベルトは慌ててエテルナの方を向くと、エテルナは杖を持って何か喋っていた。

「――水の力よ、我に力を！ 穢れし魂に清き光を！」

その台詞と同時に、エテルナを囲むように水色の魔方陣が広がる。

そして。

「『マナンティアール』!!」

エテルナがそう言った途端、エテルナの背後から恐ろしい程の量の水が湧きだしてきて、その後に毛玉達をのみ込んでいった。

「……これってもしかして、」

「——もんすたあだったりしてた訳？」

と、ギルベルトはぽかーんとその様子をただ見ていた。

「——って、俺様も戦わなきゃじゃねえかッッ！！」

ハッと我にかえったギルベルトは、木刀を握って毛玉達に斬りかかった。

「死ねや塵共オオオオオオオオオッッッ！！」

主人公が言うには随分とアレな台詞を言い放ちながら、ギルベルトは毛玉達を一刀両断していく。

三人は協力して毛玉達を倒していき、やっと最後の一匹となった。

「どうする、誰が片付けちまうか？」

とフォンシエが問いかける。

勿論それにギルベルトが黙っているはずもなく、自慢げに木刀を持ちながら「勿論俺様！！」と叫んだ。

「おっけ。なら頼むよ」

「その、ギルベルト——さん。頑張ってください」

彼の武器が木刀だったために、エテルナは少し不安げだったが、さっきの戦いぶりを見たために、なんとかなるだろうと少し思えた。

「んじゃ、お見舞いしてやる！！——必殺、『業火剣』！！」

炎に包まれた木刀（焦げないのはお約束）は、毛玉を一刀両断した。

「————うっし華麗なる俺様の勝利ーっと」

「お前だけじゃなくて、俺達も頑張ったんだからな？」

「はいはい下僕は黙ってろ」

「ったく、ほんとお前って奴は……」

手にかかる息子のようなギルベルトに少し呆れを覚えつつ、フォンシエはため息をついた。

エテルナは困ったような顔をする。

「————悪い人ではないみたいだけど、どう接すればいいんだろう……。」

何故ギルベルトに怒らずに過ごせるのかなあと疑問に思いつつ、エテルナはそっとフォンシエの背後についた。

L v. 11 毛玉「主婦の天敵は物理で解決」

「そーいや、さ」

獣道を歩きながら、ギルベルトはフォンシエに問いかける。

フォンシエは頬を軽く掻きながら、ギルベルトの方に顔を向けた。

「あの何か変な毛玉みたいなアレは何だったんだ？」

「そりゃ、モンスターに決まってるじゃないか」

「……いや、けろっとそう答えるなよ。俺様が聞きたいのは名前だよねえむ!!」

と、珍しくギルベルトがツツコむと、フォンシエは小さくため息をつきながら、

「ちよつとボケてみたかったんだよ……」

とボソリと呟いた。

そんなフォンシエを軽くスルーし、ギルベルトはエテルナに問いかけたいた。

「んで、何だったんだアレ？」

エテルナはビクリとしながらも、おどおどとその質問に答えた。

「えと……」

——あのモンスターは『ペクエノ』という名前なんです。

毛玉のようなモコモコとした身体に足が生えていますが、何故か浮遊して動いています。

基本あまり強くないですが、集団で来ると手ごわかったりします。

あと、色々な属性のペクエノがいるので、弱点属性の子がくると「あー、分かった分かった。もういいや」

ギルベルトは顔をしかめてエテルナの説明を制する。

エテルナは気付けば長々と喋っていたことに気付いて、顔を赤く染

め、口に手をおいた。

一方、フォンシエはスルーされた事に少々傷つきながらも、気にしない方が寿命が延びると思い、言及することをやめた。

「……そういや、ペクエノは面倒なことに結界を抜けやすい性質らしくて、時々掃除中にこいつを見つける時があんだよなあ。――ま、ハタキとかで叩けば死ぬけど」

1人はコクコクと頷き、1人は不思議そうに首を傾げた。



段々と緑が濃くなり、サワサワという葉の音がより一層目立つようになってきた。

だが、そんな事を気にする余裕などさほどない、といえる位数多くのモンスターが襲いかかり、三人は大分へとへとになっていた。

「しかし、早くつかねーかなあ」

と、ジト目のギルベルトは口をへの字に曲げてぼそりとぼやく。

「多分、もうそろそろなんだろうけど……。道間違ったかなあ……」

段々不安になってきたフォンシエは、何度も自分の頭を指でポンポンと叩いていた。

そんなフォンシエを見て不安になってきたエテルナは、そわそわと辺りを見回した。

——あれ？

エテルナは、奥の方に誰かに気付いた。

だが、人というよりは何か違和感を感じ、エテルナはそつと杖を構える。

「ん、どうかしたのかエテルナ」

フォンシエが声をひそめてそう言うと、エテルナは奥の方に居る何かについてフォンシエに伝えた。

「——成程。もしかしたらその守護者、とかかもしれない。

……ギルベルト」

「ん、わーってるよ」

ギルベルトはゆっくりと木刀を構え、ニヤリと笑った。

「待ってろよ、雑魚。俺様がミンチ肉にしてやるぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3725y/>

勇者→魔王＝＼（＾o＾）／

2011年12月3日15時52分発行